コロナ禍における対人援助職のオンラインを用いたネットワーク形成とその可能性

千　葉　晃　央

キーワード：対人援助職　ネットワーク　オンラインミーティング

筆者は支援者支援を目的とした事例検討会を2001年より継続的に開催してきた。しかし、コロナ禍となったため、オンライン開催に移行することを決め、その特性を踏まえた会の持ち方を工夫しながら、12回実施した。そこで、オンラインを用いた支援者支援の可能性を明らかにするため、参加者へのインタビュー調査を行った。そこで明らかになったのは、1つは参加者が経験している「物語」を語り合うことを通して、より適正な現状の理解ができていると感じていたこと、2つは性急で明確な答えが出ないなかでかかわり続けるという支援者の姿勢が必要という気づきがあったこと、3つは支援者の賦活化という3点が示された。こうして、支援者が今後兼ね備えるべき状況への理解の仕方や姿勢について、共に気づく場となっていた。そういった時間を重ねながら支援者としての成長と参加者間のつながりをつくっていたことが分かった。対人援助職者を支える上でのオンラインを用いる有効性が一定あることが明らかになった。

Ⅰ　問題意識と背景

筆者は様々な援助職が協力しあい、つながりを持ちながら、地域の課題や住民の困りごとに向き合う社会を実現したいと考えてきた。8050問題やヤングケアラーの社会問題等をみてもわかるとおり、住民は特定の分野や領域のみと関わって生活しているわけではない。暮らしは広く社会にあるヒューマンサービス全般を利用し形成される。サービスの提供主体は自治体、民間事業者、株式会社、NPO（非営利団体）、ボランティアなど多様である。また、その提供方法はインターネットの普及もあり、複層的で多岐にわたるものとなっている。一つ一つのサービス提供主体である組織は、公的なものを除くと中規模、小規模がほとんどである。そのため人材育成やキャリアアップにおける課題（ポストが少なく昇進等の機会が限定される、一人職場や非常勤雇用もある、一つの職場が持つ職業人としての成長モデルが少ない等）は必然として生起している。ヒューマンサービスにおいては、人と人とが作り出すサービス提供場面がコンテンツそのものである。退職等で、その「人」（支援者）が交替すれば関係がゼロからやマイナスからの再スタートと感じられることも多い。

そんな中で、支援者が意欲を持ち続けて業務にあたることは、とても重要となってくる。支援者は、今ある課題に取り組み、何とかいい時間を作ろう、解決に向けて住民と一緒に歩もうという気持ちであふれていることが望ましい。そのためには支援の仕事が面白い、支援の仕事を続けたい、仕事にやりがいがあると支援者自身が感じることは必須である。筆者はその実現に必要なことが2つあると考えてきた。1つは「学び」であり、2つは「ともに学ぶ仲間」の存在である。1つめの「学び」には「目の前にいる方（被支援者）から学ぶ」という姿勢は外すことができない。2つめの「ともに学ぶ仲間」は同時代に同じような職種で、共に社会課題（福祉課題）に向き合う仲間は手本にもなり、有益な情報提供者にもなり、なおかつ感情の共有者にもなりうる。対人援助の各現場では様々な専門職を置くような豊かな人員配置が難しい。しかし、人にかかわっている以上、様々な課題も持ち込まれる。そんな時、仲間が専門領域外のサービスの情報を教えてくれたり、支援方法のポイントも教えてくれたり、さらに直接連携もしてくれる。そういった経験を筆者はしてきた。「ネットワーク」を形成することが住民への間接支援になり、支援者支援になると考える。

社会福祉政策の役割は「家族機能の社会化」とされてきた。そして、2000年前後の社会福祉基礎構造改革以降、福祉サービスをはじめとするヒューマンサー

ビスが官民に渡って幅広く提供されるようになった。しかし、2020年からのパンデミック（感染爆発）の状況により、「社会」が変わってしまった。これまでは対面にて様々な研修、会議、集会、時にオフタイムの交流なども通じて出会い、ネットワークを形成してきたが、コロナ禍ではそうはいかなくなった。人と人との接触の機会を極力少なくすることが求められ、これまでとは異なる対処が急務となった。その結果、オンラインミーティングを用いた会議や研修も広がった。社会福祉士等の福祉領域の専門職養成では、ネットワーク、コーディネーション、マネジメント等の言葉で「支援者の連携」の重要性は不可欠とされている。しかしパンデミック下において、それをどう取り組むのかの報告はまだ僅かである。

Ⅱ　研究目的

第Ⅰ章の問題意識を踏まえ、本稿ではコロナ禍におけるオンラインを用いた支援者ネットワーク形成の在り方やその可能性について、筆者自身の取り組みと参加者のインタビューに基づいて考察する。

オンラインによるネットワーク形成に関する研究として、高松（2021）による「月曜会」というグループ活動に関する報告がある。「月曜会」を40年毎週行い、そのグループでのコロナ禍対応としてオンラインミーティングをした6カ月（加えてオンライン、オフライン同時開催のハイフレックス方式での実践）をまとめている。そこでは「1時間半程度なら集中力も続く」「意見が食い違って嫌悪な雰囲気になることもない」「交通手段も不要なので、忙しい人にとっても参加しやすい」がメリットとして挙げられた。一方で「ボディランゲージが使えない」「一緒にお菓子が食べられない」「小声で隣の人とちょっと言葉を交わすことができない」「情報量が限られる」「そのため意外な発想・展開は少し難しい」「自宅にネット環境がないとできない」「家族と同居のためオンライン参加の環境がない場合の工夫の必要性」をデメリットとして挙げている。しかし、この会は大学内での友達作り等を目的としている。そのため、本稿で扱う支援者ネットワークの形成による「支援者支援」の取り組みとは異なる。また、主催者からの主観的な報告であり、本稿のようなインタビュー調査による客観性も一定伴った論文はまだまだ少ない。中山ら（2017）はオンラインミーティングについて「雑談を含む対話が生まれにくいので、劣る」といった指摘もしている。

本稿の独自性は、パンデミック状況における支援者支援の数少ない実践報告、さらに支援者間のネットワークの形成を目的とした継続性のあるオンラインミーティングについての成果をインタビュー調査によって明らかにすることである。

Ⅲ　実施経過

筆者は、オンラインミーティング開催以前から、地域の対人援助職を応援することを目的にした「家族をテーマにした事例検討会」を継続開催してきた。2001年12月から開始し、8月を除く毎月1回、年11回行ってきた（途中、体制の関係で2か月に1回開催の時期、自然災害による影響で開催できない時もあった）。2020年1月には208回目を行い、会場は京都府北区にある立命館大学衣笠キャンパスや大阪府茨木市にある立命館大学いばらきキャンパスの教室を借りて実施してきた。この活動は筆者が立命館大学に福祉現場で働く社会人院生として在学していた時に始め、立命館大学の団士郎先生（現在、同大学院訪問教授）が開始以来アドバイザーを務めてくださっている。

参加者は、関西を中心とした対人援助職者等であった。主には民間の福祉職、行政の福祉職、心理職、教育職等であった。支援者のネットワークづくりも目的にしているため、参加要件に資格の有無や、経験年数、役職、職種は設けていない。1回の参加者は約7名から25名ぐらいを推移し、平均で10数名が多かった。

会の内容は、大きく前半と後半に分かれている。後半は事例検討とし、毎回一つの事例を取り上げて、ジェノグラムを用いて検討を行った。手法はナラティブ・セラピーや家族療法におけるリフレクションの方式、ブラインドアナリシス（事例の未知の部分を推測することから始める分析方法）、バズセッション（2～3名の小グループに分かれて話す）を用いたグループワークを採用している。

前半は、各参加者が一人一回4分程度話す。アイスブレークの意味を含めて、名前、所属、「最近、自分の周辺ではこんなことがあるんです」という話をする。仕事の話でも、プライベートな話でもよい。話される

内容は「支援での工夫」「ペットがかわいい」など様々である。その多様な話題は、場を和やかにし、関係を解きほぐす。全員が話すということもあり、会への参加度を向上するきっかけにもなってきた。

筆者は、過去の研究で「家族をテーマにした事例検討会」の成果について、参加者へのインタビューを行っている（千葉ら 2013）。そこでは「所属意識を持っている」「モチベーションの向上」「多職種の連携の事実とノウハウを学ぶことができる」「勉強仲間とのつながりが持てる」「多面的ケース理解ができるようになった」「バラエティ豊かな具体策の獲得」「家族理解が以前よりできるようになった」というような効果が語られた。成果として、支援の高度化、支援者の賦活化等が示された。

この章では、この「家族をテーマにした事例検討会」がどのようにパンデミックの状況に対応し、オンラインミーティングの「となりの事情」へ移行していったのかその経過について、まずは報告する。

1　コロナ禍によるオンラインへの移行期

2020 年 1 月は通常通り立命館大学いばらきキャンパスで開催し、同月に日本で初めてコロナウィルス感染が確認された。2020 年 2 月は通常通りの開催の告知を行った。しかし、国内で感染が徐々に拡大し、さらに海外での感染拡大、死亡者数等のニュースが入ってきていた。そのため、止む無く 2 月開催は中止とした。判断の根拠は、会は約 20 年にわたり継続してきたので、急いで実施する必要もないこと、さらに大学から教室を借りて会場にしていたため、感染が起これば大学にも迷惑がかかってしまうこと、そうなれば今後の使用ができなくなる可能性があることが理由となった。こうして 2020 年 2 月 20 日（木）に予定していた 209 回目は中止となった。翌日の 2 月 21 日（金）には日本国内の累計感染者数が 100 人を超え、2 月 27 日には 3 月 2 日から日本全国の小中学校と高校の臨時休校を内閣総理大臣が要請した。こうして、コロナ禍における自粛生活が本格化していった。

それまで、開催の告知はインターネットを通じたメーリングリスト（会独自のものと主催者が所属する専門職団体、学会他計 7 か所）、SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）のフェイスブックにある会のページでイベント機能を使って行ってきた。中止連絡も、それらを通じて行った。そして 2020 年 3 月 7 日時点で、感染状況が落ち着くまで、差し当たり 3 月、4 月開催予定の「家族をテーマにした事例検討会」の休止を伝えた。当時はかなり日常生活において行動制限、活動自粛が実施されており、業務自体の縮小や休止、研修等の会合が相次いで中止となっていった。そのころから、オンラインでの開催を望む声が届き始めた。そのため、筆者はオンラインミーティングができる ZOOM（ズーム）の契約をし、様々な機会も見つけてオンラインでの運営ができるよう準備をしていった。それまで、筆者は住民が接する援助職が元気でいること、意欲をもって仕事ができる状況を作ることを願って活動してきた。しかし緊急事態であるならば、なおさらである。そのため、2020 年 4 月にフェイスブックの「家族をテーマにした事例検討会」のグループ機能（グループ登録をした人全体でメッセージを共有交換できる機能）の新規作成、そして SNS の LINE（ライン）のグループも新規作成し、これまでのつながりがある方と直接連絡が取り合える状況を作った。その途上では、近況を伝え合うやり取り、事例検討をしたいという要請、オンライン化を望む声が交わされた。それらを受けて、5 月にオンラインでの試行版を開催することを決めた。

2　オンラインミーティングの開始期

「家族をテーマにした事例検討会のスピンオフ企画」（後に「となりの事情」1 回目として位置づける）として、オンラインミーティング開催を告知し、実施した。内容は、「家族をテーマにした事例検討会」の前半部分の「最近、自分の周辺であったこと」を持ち寄ることとした。この 1 回目の経験から、オンラインでの開催において、4 点分かることがあった。

①バズセッションが困難：オンライン上の参加者全体のグループから数名程度の小グループに分かれて考えることができるオンラインミーティングの機能（ズームならブレイクアウトルーム機能）がある。この 1 回目では 16 名の参加だったため、この機能を用いた。しかし、小グループに分かれた後、どんなやりとりがあるのかがファシリテーターから見えず、把握が難しかった。また、そこで会話がない、もしくは不快な会話が行われていても主催者にはわからないことが予測された。また、リアルでの小グループでの話し合いは

隣からきこえてくるという不規則な相互作用も盛り込まれているが、その作用もないことが分かった。そのため小グループでの体験をコントロールできなかったり、体験の差が大きくなったりする可能性があることが分かった。

②偶然性の欠如：見知らぬ人ばかりの研修や学会大会に行ったときに、そこで偶然出会った人と、同じ方向の電車に乗り合わせ、そのついでにお茶をしたりすることは時々起こることである。そこには職業選択や居住地、移動手段、研修参加等において、お互いに共通するものがあるという偶然が存在する。そうした共有体験が人と人との距離を近くするのはいうまでもない。それが2つや3つ、2回目、3回目となってくると更に出会いに神秘性すら帯びてくることすらある。しかし、こうした体験がオンラインでは得にくい。リアルでは会場の出入りの時や休憩時間にできた、ちょっとした会話もオンラインではしにくい。定時に集まり、すぐ本題に入り、終わるとスイッチオフでいきなり自宅である。出会った人と空き時間に「最近どうですか？」「私も同じことで苦労しているんです」といった会話の成立が難しい。しかし、そんな会話からも役に立つ情報や、自分の苦労と似た経験をし、私の苦労にも目を向けてくれる人にこれまでは出会ってきた。そんな経験にも人は支えられてきた。そういったことがオンラインでは起こりにくかった。

③瞬発的な会話が困難：現実の会話のキャッチボールのようなやり取り、瞬発的な会話の面白さはオンラインでは難しい。コンマ何秒のズレ（遅れたり、音が重なって聴き取れない）がある。またそのズレが疲労をもたらす。そのため進行は一定の構成されたものがあった方がよいことが分かった。

④高い疲労感：「家族をテーマにした事例検討会」では約2時間半行ってきた。しかし、オンラインでは疲労度が高い。理由は③の通りである。実感として2時間程度が限界ではないかということが分かった。

しかし、これまで京都や大阪の会場に定期的に行くことができず、オンラインなら参加が可能になる方もいた。この経験を踏まえて、会の設定をアレンジしていった。ここではその後2021年8月までの開催実績と参加人数を表1に示す。2020年9月以降は、月1回の開催となり、各回9名の参加があった。

表1　オンラインミーティング　となりの事情　開催実績

回	実施日	人数	コロナ等社会情勢
1	2020年5月21日（木）19～21時	16人	全国の緊急事態宣言が段階的解除
2	2020年9月17日（木）19～21時	9人	安倍総理から菅総理へ交代
3	2020年10月15日（木）19～21時	9人	国内累計感染者数10万人超え
4	2020年11月19日（木）19～21時	9人	国内の累計死者数が2,000人を超
5	2020年12月17日（木）19～21時	9人	Go Toトラベル全国で一斉に停止
6	2021年1月14日（木）19時～21時	9人	京都・緊急事態宣言発令
7	2021年2月18日（木）19～21時	9人	京都・緊急事態宣言解除
8	2021年3月18日（木）19～21時	9人	緊急事態宣言全国で全て解除
9	2021年4月15日（木）19～21時	9人	京都・緊急事態宣言発令
10	2021年5月20日（木）19～21時	9人	京都・緊急事態宣言中
11	2021年6月17日（木）19～21時	9人	京都・緊急事態宣言解除
12	2021年7月15日（木）19～21時	9人	京都・まん延防止等重点措置

（著者作成）

3　定例開催期

このオンラインミーティングは現在「となりの事情」と題し、「家族をテーマにした事例検討会」を行っていた毎月第3木曜日（8月除く）に定例開催となった。時間は19時から21時の2時間としている。参加人数は、参加者の顔がパソコン画面に並ぶ上で、相手の表情もわかる大きさで、なおかつスクロールしなくていいことを考慮し、定員9名とした。カメラは常時オンとしている。申し込み方法は先着順とし、定員達成次第締め切っている。参加要件も資格等、特に設けていない。内容は、「家族をテーマにした事例検討会」で行ってきた前半の「最近、自分の周辺であったこと」を話すセッションを行っている。まずは参加者全員一巡そのテーマで話をする。時間を一人4分程度にし、ファシリテーター（筆者）がキッチンタイマーで、それぞれが持ち時間が平等になるよう管理をしている。その1巡目終了後アドバイザーの先生が話す。その話と参加者の1巡目の話を聞いて、残り時間を均等に割って

一人一人話していく。そして、その2巡目が終わると最後にアドバイザーの先生の話をいただき、終わっている。

「となりの事情」の進め方
(1) 参加者一人ずつ「最近、自分の周辺であったこと」を話す（一巡目）
(2) アドバイザーのコメント
(3) コメントや他の参加者の話を受けて参加者一人ずつ話す（二巡目）
(4) アドバイザーのコメント

タイトルも「家族をテーマにした事例検討会スピンオフ企画オンラインミーティング　となりの事情」とし、先述の通り、通称「となりの事情」とした。この名称はアドバイザーを務める団士郎先生の著書名と同じであり、使用の許可を得たものである。コロナ禍において、やらなければならない研修、会議はオンライン化したが、その前後や休み時間にあった「となり」にいる方と話す機会を私たちは失っていると感じていた。そんな「となり」の方とのコミュニケーションの機会を取り戻すことに意味があると筆者は考え、「となりの事情」という名称が頭に浮かんだ。このミーティングでは参加者が実際に画面上で上下左右斜めの「となり」となる。偶然「となり」になった人、そうした偶然を含んだ援助職と定期的に対話をする場所が支援者支援にあってもよいのではないかと考えたのである。

以上のような経過とやり方で、2021年7月まで12回実施し、現在に至っている。そこで、次章では、この「となりの事情」の成果について、参加者のインタビュー調査に基づいて検討する。

Ⅳ　参加者へのインタビュー調査

1　目的

オンラインミーティング「となりの事情」での支援者支援の効果を検証する。そこからオンラインを用いた支援の可能性、オンライン上でのグループワークの可能性、現在のパンデミック、将来に再び起こるパンデミックや災害時における支援者支援の可能性をインタビューから検証する。

2　方法

対象：「となりの事情」参加経験があり、なおかつ以前の「家族をテーマにした事例検討会」の参加経験がある7名にインタビューを行った。インタビュー対象をこのようにした理由は、筆者の以前の「家族をテーマにした事例検討会」に関する成果研究との比較を行い、オンラインとオフラインでの支援者支援の比較検証も意図したものである。

調査方法：インタビュー調査を、調査者（筆者）と1対1で、個別に実施した。オンラインミーティングを用い、所要時間は各回1時間程度であった。調査時期は2021年8月である。

調査内容：半構造化面接の方式を取り、4つの質問を行った。質問の内容は以下の通りである。

問1　「となりの事情」に参加しようと思った動機、きっかけ、期待はどんなものでしたか。
問2　参加して、いかがでしたか。どんなふうに感じてきましたか。
問3　「となりの事情」への参加は自分自身や自分の生活や仕事にどのような影響を与えましたか。
問4　「家族をテーマにした事例検討会」と比べて、違いはどんなところでしょうか。
　　メリット、デメリットなどいかがでしょうか。

3　分析の方法

逐語録を作成し、筆者によるカテゴライズ及び、ラベリングによる要点の整理を行った。

4　倫理的配慮

調査対象者に対して、インタビュー依頼時に研究の目的や収集したデータの取り扱い（データは匿名化し、逐語データは本稿のみで用いる）について書面で説明した上で、研究参加や逐語データの掲載について同意を得た。以上の配慮のもと、筆者が所属する「日本社会福祉士会」が発行する研究誌の研究倫理規定に従って調査を行った。また、京都光華女子大学倫理審査委員会の承認（第132号）を受けて実施した。

Ⅴ　研究結果

筆者はインタビューの内容を逐語録にし、調査対象者のそれぞれの逐語録から同種の発言についてまとめた。そのカテゴリーごとに共通のテーマをラベリングし、質問ごとに以下のように整理することができた。

1　問１「となりの事情に参加しようと思った動機、きっかけ、期待はどんなものでしたか？」

(1) 喪失体験への対処

コロナ禍による人間関係の喪失状況を埋めることが期待されていた。「悲しいことにコロナの影響でみんなが集まるというのができなくなって」「人との接点が減っているというのがとても強くあった」「生活環境がガラッと変わっていろんなものが切れた」などである。この期間は多くの社会的なつながりが失われていた。そうした喪失体験が参加の動機として語られた。

また「家族をテーマにした事例検討会」がなくなった中で、代替となる機会を期待する気持ちもあった。「家族をテーマにした事例検討会の人たちに人恋しいので参加したかった」「オンラインで再開しませんかとご連絡したのも、定期的にお会いしている人たちとね、いつ再開するかわからないし…」「いつも集まっているメンバーで集まってみたらいい」などがあった。これまで継続的に参加してきたものがなくなり、「学びの場」と「恋しいと思える対象」を失っていた。また、特殊な状況だったからこそ、信頼できる人間関係を求めたともいえるのではないか。

(2) 定期的な機会を持ちたい

インタビューの中で、月に１回、他の人の話を聞き、自分を振り返る機会だったと「家族をテーマにした事例検討会」を評する方が多く、その機会をオンラインでも得たいということが語られた。「1カ月に１回出会わせてもらって、そこで自分も浄化されて、みんなも同じようなところで頑張っていると感じる。頑張りの質は全然違うけれども、そういう仲間に出会えて、また力をもらって、１カ月がんばってというサイクルだった」「定期的に自分の考えていることを表現して考え方、感じ方を修正する。メンテナンスに近い感じ」「帰省もないじゃないですか。季節感とか区切りがとにかくなくて」「また１カ月たったな。もう来週あるな」「そこで位置を確認する」「1カ月に１回だから、この１カ月はこれをがんばろうと最後にノートに一行書いています。１カ月に１回でいい感じです」という声もあった。自分の考えていること、行っていることを言語化することで、自分への気づきがあると感じていた。また他者からのリアクションを得ることもあり、そうした体験から自分を見直し自分のコンディションを調

表２　問１「参加の動機・期待」に対する回答

カテゴリー	主なインタビュー内容	対応する会の機能
１．　喪失体験への対処	「悲しいことにコロナの影響でみんなが集まるというのができなくなって」「人との接点が減っているというのがとても強くあった」	対話の場を作る
２．　定期的な機会を持ちたい	「1ケ月に1回出会わせてもらって、そこで自分も浄化されて、みんなも同じようなところで頑張っていると感じる」「定期的に自分の考えていることを表現して考え方、感じ方を修正する。メンテナンスに近い感じ」	定期開催 継続開催
３．　オンライン化による参加のチャンス	「一度家族を考えるということをずっとされてきた活動に、何かのかたちで参加したくて、こんな機会でないとできないと思って、オンラインだからこそ、やっと参加できる」	オンライン開催
４．募集人数の少なさによる躊躇	「参加したいというリクエストが多い場合は譲るといいなと」「私が入ってはいけないと思った。いつものメンバーが入れないじゃないですか」「私はありがたいけれども、毎回参加していいんだろうか」	参加定員の設定

（著者作成）

整できる機会だと複数語られた。また、定例であるという規則性も行動制限がある中での区切りや節目となっていた。

(3) オンライン化による参加のチャンス

オンライン化でアクセスの問題（地理的、時間的）から、これまで参加をしたいけれども、できなかった人は好機と感じていた。「一度家族を考えるということをずっとされてきた活動に、何かのかたちで参加したくて、こんな機会でないとできないと思って、オンラインだからこそやっと参加できるという思いがありました」という声もあった。

(4) 募集人数の少なさによる躊躇

参加定員があったため、自分が一席取ってしまうことを遠慮する方も複数いた。「参加したいというリクエストが多い場合は譲るといいなぁと思っている」「私が入ってはいけないと思った。いつものメンバーが入れないじゃないですか」「私はありがたいけれども、毎回参加していいんだろうか」などである。誰に対しての遠慮かといえば「今までよく参加されていた人」に対してと、もう一つ「新しく参加したい人」のために開けておきたい思いも語られた。同時に、参加要件を設けていないことで「門戸が広い」という評価もあった。これらは新しい人の参加も期待している気持ちの表れともとらえることができた。

2　問２「参加して、いかがでしたか？どんなふうに感じてきましたか？」

(1) コロナ禍での被災体験の共有ができる

初めてのパンデミックという経験の中で、どんな状況があり、どんな対処や苦労があるのかを知ることは重要だったことが語られた。「コロナ禍で今みんなどんな暮らしになっているかということが共通事項で話されるので、私は皆さんいい話しているな」という発言等があった。また、特に「最初は今月もまた無事に会えましたねという感じでした。元気ですねという。コロナのこともよくわかっていなかったから、皆さん、また１カ月健康に、という雰囲気もありました」「初回は再会できたような感じでした」。パンデミックの悲惨な状況（特に海外）を見ていると、再会のうれしさ、元気でいることの喜びをお互いに持ったのは事実であろう。わからないことも多く、テレビからでもネットからでもない情報があること、そしてこうして話せる場所が存在することの参加者にとっての意味が語られた。

(2) オンラインによる信頼感の増幅と排他性

「家族をテーマにした事例検討会」への信頼があっ

表３　問２「参加した感想」に対する回答

カテゴリー	主なインタビュー内容	対応する会の機能
１．コロナ禍での体験の共有ができる	「コロナ禍で今みんなどんな暮らしになっているかということが共通事項で話されるので、私は皆さんいい話している」「皆さん、また1カ月健康に、という雰囲気もありました」	支援者の賦活化
２．オンラインによる信頼感の増幅と排他性	「基本的に自宅じゃないですか。皆さんリラックスしている。より一層リアルな話をされているなという感じ」「集まりたい雰囲気がある」「入りにくかったりする人もいるだろう」	オンライン開催
３．　プログラムが適切である	「臨床の話に限らないのがいい」「９人の話を2時間で聞けるのはよい」「先生の話は思うことといっぱいです。そういう考え方するんだと。じゃあ私はどう思うかというのがある」「癒しの効果もある」	ネットワークの構築
４．可能性を幅広く持つための自己投資	「何かの備えになっている」「いつもの小さな定期的なとなりの事情や家族をテーマにした事例検討会というのはきっと何かに備えている」「そこだけにいるとものすごく常識が狭くなってくる」	他領域、他者からの学び

（著者作成）

たので、そこにオンラインの要素が加わることでより信頼感が増幅された内容もみられた。
①プライベートな空間：自宅からの参加も多く、よりリラックスして参加していたため､深い話をしていた。「基本的に自宅じゃないですか。皆さんリラックスしている。より一層リアルな話をされているなという感じ」「すごいプライベートな空間でやっている」等である。録画をしていないことも作用した可能性も考えられる。
②移動がない：時間的、肉体的、スケジュール的にも負担が減ったことが語られていた。「家から参加できるのは楽よね」他である。家事ができる、夜の移動がもたらす安全面での負担がないことも歓迎されていた。また帰りのバスや電車の時間が迫ることによる焦りからも解放されて、時間の制約も軽減し、ゆったりと過ごせていることも話された。
③場の継続性：自分がコミットしたところがなくなるということは喪失感が大きい。「家族をテーマにした事例検討会」は 2001 年から 2020 年まですでに存在してきた。「休んでいても、でも自分がいなくても継続している。そこに行ったら、いつもの参加者の皆さんにお会いできるのは安心ですよね。安心感があります」等である。その存在の継続による信頼感も語られた。
④家族理解に価値を置く参加者の存在：人間も複雑で、その人間がつくる家族は当然複雑で、一面的な理解もできないし、円環的に、総合的にとらえるということをわかっている人が集まっている場への期待も語られた。「うまくいかなかったら、うまくいかなかったことが絶対ダメではなくて、うまくいかなかったことでもいいことは残して、そのままやろうとか。そういう考え方が根付いた方たちの集まりという安心感もあります」「共通しているのが家族理解をベースにしているという考え方ですよね」等である。支援の現場では、直線的因果律による理解と実践が求められ、短期的な成果を求められる経験があることも複数回語られた。人間理解や家族理解の視点は、当然仕事上の対象者だけにではなく、「となりの事情」の参加者にも同様に向けられていた。それらが作用し合い、「集まりたい雰囲気がある」とも語られ、相互理解が生まれているようにもとらえることができた。

反対に、参加定員が少人数であり、回を重ねると、これまでの参加者がいて、新規の参加者が入りにくいと感じるだろうということも語られた。「ちょっと入りにくかったりする人もいるだろう」「今から参加する人がいるとどんな動機があったり来てみたら、どんな感覚をもったりするのか知りたい」等である。

(3) プログラムが適切である

①自分の話が他者に影響するのがよい：参加者には 2 回話す順番が回る。特に 1 回目の途中から、そして 2 回目に話す機会は、それまでの他の方の話からの影響も受ける。そして同時に自分も他の参加者に影響を与えている。この経験は、「容認」や「応援」のように感じることにつながっていた。自分の経験していることに意味がある、自分は価値があると感じる機会になっていた。
②話題の幅が広いのがよい：「臨床の話に限らないのがいい」等の発言があった。話題に関しても仕事上のことに限っていないため、参加者自身があるがままを受け容れてもらったと感じていた。
③新しい人にも門戸を開き、ある程度は継続参加というバランスがよい：継続して参加している人が一定数いる実態があったことで「1 年やってきたら同志感がある」等のように、場の安定や進展を感じる機会も生んでいた。その上で、実際に新しい参加者も断続的に存在していた。全体としては、継続による物語や関係性の積み上げがある良さが語られた。
④参加でリフレッシュできている：「癒しの効果もある」「そこでリフレッシュになっている」などもあった。
⑤多職種の場という希少性：「一番今なくなっている時間」であり、機会として貴重と語られた。
⑥参加者の魅力：参加者が語る話に、それぞれが何かに挑んでいる近況が語られることも多い。その生き様をみるし、自分の生き方探しにもなり、ヒントになっていると語られた。「今ここに集まったそれぞれのお隣さんの事情の変化、つまり生き様みたいな。皆さんの生き様をみさせていただいているような感じ」「人の生き方はいろいろだと思いました」「会ってみたいです」等である。また「9 人の話を 2 時間で聞けるのはよい」という声もあった。仲間に出会えるし、また「リアルで会ってみたい」とも語る。「オンラインだからこそ人の信頼が大きい」という意見もあった。
⑦アドバイザーの魅力：アドバイザーを務めてくださっている団士郎先生からの学びは当然魅力として語

られた。「自分のこととして消化できる部分が必ずあって、そういうところで鍛えられている」「ゆるっ、ふわっではない」「先生の面白さ。動きも発想もすごい。視点がやはり違う」「生き方探しの一つといえる」「先生の話は思うことといっぱいです。そういう考え方するんだと。じゃあ私はどう思うかというのがある」「ものすごく相対化されました」他である。「ピリッとする」「成長につながる」というようにも感じていた。

(4) 可能性を幅広く持つための自己投資

いざとなったら話すことができる、きくことができる関係があることは、「何かの備えになっている」ことが語られた。「いざとなったら、きいたりしてもいい」「いつもの小さな、定期的な、となりの事情や家族をテーマにした事例検討会というのはきっと何かに備えている」等である。参加者が仕事に、対象者に、人生に真摯に向き合っていることの表れともいえる。

自分の領域だけにいると「狭くなる」とも語られた。「そこだけにいるとものすごく常識が狭くなってくる」「いつも違うものを入れていて、当たり前と思ったけども、違うことがよくわかる」などの声である。自分とは違う立場の支援者だからこそ知っている動きを自分の活動や選択のヒントにしていた。

3　問３「となりの事情への参加は自分自身や自分の生活や仕事にどのような影響を与えましたか？」

(1) 生活の中での楽しみ

「楽しみ」であることを語る人が複数あった。「となりの事情が楽しみになった」「きいてもらいたい」「どんな反応してくれるかな」「終わった後は普通に楽しい」他である。居心地がいい時間を過ごしたこと、「行きつけの場所」と思えるという表現もあった。

(2) モチベーションアップ

「元気になる」「精神的にがんばろうと思える」「モチベーションが上がる感じです」「次の日、私は元気です。精神的に元気」「となりの事情がある週はなんとなく頑張ろうと思えたり」という声があった。深い話をしても面白がる姿勢が参加者にあり、過剰な深刻さ、こうあるべきなどの原理主義になりすぎない雰囲気も働いているとも語られた。

(3) 学ぶための負荷

となりの事情でしていることは「実は私たちが相談援助をしているときに、していることに近い」「相談援助でクローズアップして大事にしなくてはいけない部分だけど、軽視されている」「えぐれた報告をしてくる人が多い。そのえぐった報告を話しても、むしろ面白がってくれる」「現在地からどうしようか」等があると語られた。他領域の話を自分の領域に置き換えて考える等、参加者の思考の活性化があったようである。「疲れが増す回もある」ということも語られた。こうした負荷も学びでは感じることは織り込み済みと理解ができている発言も複数みられた。特に、物事に対して「どう挑んでいるか」「どう生きていくのか」「他者をまずは肯定できるか」「受け止められるか」「自分がどのように考えて、どう生きるか」という本質的な

表４　問３「参加による影響」に対する回答

カテゴリー	主なインタビュー内容	対応する会の機能
１．生活の中での楽しみ	「となりの事情が楽しみになった」「きいてもらいたい」「どんな反応してくれるかな」「終わった後は普通に楽しい」	支援者の賦活化
２．モチベーションアップ	「元気になる」「精神的にがんばろうと思える」「モチベーションが上がる感じです」「次の日、私は元気です。精神的に元気」「となりの事情がある週はなんとなく頑張ろうと思えたり」	支援者支援
３．学ぶための負荷	「どう挑んでいるか」「どう生きていくのか」「他者をまずは肯定できるか」「受け止められるか」「自分がどのように考えてどう生きるか」「疲れが増す回もある」	支援の高度化

（著者作成）

問いにまつわる表現も多くみられた。支援者自身の人生を考える上でも学びとなることを含んでいる様子があった。「何時までもという距離感ではない」というような関係性においての「侵入」や「甘え」はないことも語られた。過度な依存はなく、自立的な関係を経験できていた。

4　問４「家族をテーマにした事例検討会と比べて、違いはどんなところでしょうか。メリット、デメリットなどいかがでしょうか。」

(1) 家族をテーマにした事例検討会

①メリット:「実利的ニーズ」を持った人が参加し、「扱うことが具体的」なところが魅力という声があった。具体的とは「事例について聞きたい」「視野を広げたい」「家族のことを学ぶ」「相談の進め方を学ぶ」等である。その途上で「自分の偏りが分かる」ことがあり、それこそが「自己覚知」ではないかという声があった。

②デメリット：参加者の定員もなく、毎回参加者も異なるので「出入りが激しい」ことや、「事例検討から学びたい」という対処方法を学ぶ目的にとどまる人が多いことも挙げられた。

(2) となりの事情

①メリット：「事例がないから気軽に参加できる」という語りもあった。「家族をテーマにした事例検討会」で事例を提出してきたが故のコメントでもあった。オンラインによる影響として「その時間だけでいい」「遠い人も参加できる」があった。その場には「人の魅力」があり、人に集まり、メンバーの良さが出ているし、それを導くファシリテーションがあるとも語られた。具体的には「時間の平等性」「対話がある」ことが評価されていた。コロナ禍で職場や日常での人間関係も制限されて、「本音」を話す場面が少ないことも発言としてあった。コロナ禍での職場環境の悪化もあるが、業界として一人職場の増加や非正規雇用化での同僚の不在なども背景としてある。また、ハラスメント防止など、スキャンダルが起こらないようにする職場づくりが進み、ついついスタッフ間のコミュニケーション量自体も減っていることも語られた。そして、「となりの事情」はまだ１年であり、今後の潜在的可能性があることも語られた（「これからもっと魅力が見つかるのではないか」）。また「高度なことをしている。何もしてないように見えて」という発言もあり、この研究が果たす役割があることも語られた。

②デメリット：参加者が少人数で制限されている。そのため、偶然一緒に参加し、そこに新たな経験や価値が加わる展開は少ないとも語られた。また具体的に踏み込んだ相談機能はない、一定関係ができた少人数のところに入るのが「苦手な人もいる」ことについて、

表５　問４「相違について」に対する回答

	開催	内容	メリット	デメリット	開催回数
家族をテーマにした事例検討会	オフライン	事例検討中心	「実利的ニーズ」「扱うことが具体的」「事例について聞きたい」「視野を広げたい」「広く家族のこと学ぶ」「相談の進め方を学ぶ」「自分の偏りが分かる」「自己覚知」	「出入りが激しい」「事例検討から学びたい」ということを目的にする人が多い	2001年12月～208回
となりの事情	オンライン	支援者の体験中心	「事例がないから気軽に参加できる」「その時間だけでいい」「遠い人も参加できる」「人の魅力」「時間の平等性」「対話がある」「これからもっと魅力が見つかるのではないか」「高度なことをしている」「何もしてないように見えて」「本音（を話す場面）」	「（一定関係ができた少人数のところに入るのが）苦手な人もいる」、「何もしていないようにみえて」	2020年5月～12回

（著者作成）

この問いでも語られた。

Ⅵ. 考察

先行研究（高松 2021、中山ら 2017）で挙げられていた特性は、「となりの事情」開始期においての体験と重なるところもあった（「1 時間半程度なら集中力も続く」「意見が食い違って嫌悪な雰囲気になることもない」「交通手段も不要なので、忙しい人にとっても参加しやすい」「小声で隣の人とちょっと言葉を交わすができない」「情報量が限られる」「そのため意外な発想･展開は少し難しい」）。その上で、インタビュー調査から「となりの事情」としての特徴的な効果は 3 つの点に集約することができる。

1　物語を通した現状理解の促進

参加者は参加時に図 1 のような思考や実感の過程を踏むと整理できた。

日常において自分の話をする場はなかなかない。参加者は話したことによって、自分の体験についての意味や、感性を研ぎ澄ましていた様子がインタビューでは語られた。この効果は「コーチング」においては「オートクライン」として整理され、自分が話したことばと、その内容を自分できくことによって、自分が考えていたことに気づくとされている。つまり参加者自身の中での内的対話から「内的理解」が進む契機になっていたのである。これは自分の物語（体験）を知性化し、自己容認にもつながっている。セッションで 1 巡目、2 巡目と 2 回、自分の話をすることも効果があるだろう。1 回目は心の表層にあることである場合も多い。そして、2 回目はより奥にあるものが語られることも多い。心的防衛や抑圧が外れ、無意識を意識化する契機にもなっていると思われる。また、2 巡目は特にこれまでの他者の発言へのリフレクションでもある。それは他の参加者を容認していることを伝えることでもあり、他の人も自分の存在価値を感じる機会になっている。これは外の世界との対話による理解、つまり「外的理解」と呼べるものが進んでいるといえるのではないか。結果、臨床心理学においても目指すべき状況とされる「I am OK, You are OK.」という状態となっている側面がある。こうして自己の安定が獲得されているとするならば、「日常を面白がる」と語られたように、それを可能にする心理的余裕も生まれるだろう。内的理解、外的理解をより、社会全体や時代背景に広げて自分は今、その中でどんな経験をしているのかを再定義しているのではないか。これは「俯瞰的理解」と呼べるのではないか。

これらは話す内容を、仕事に限定していないことも作用している。公私を分けなければ周囲に面白いことや興味深いことは月に 1 つはあるだろう。結果的に自

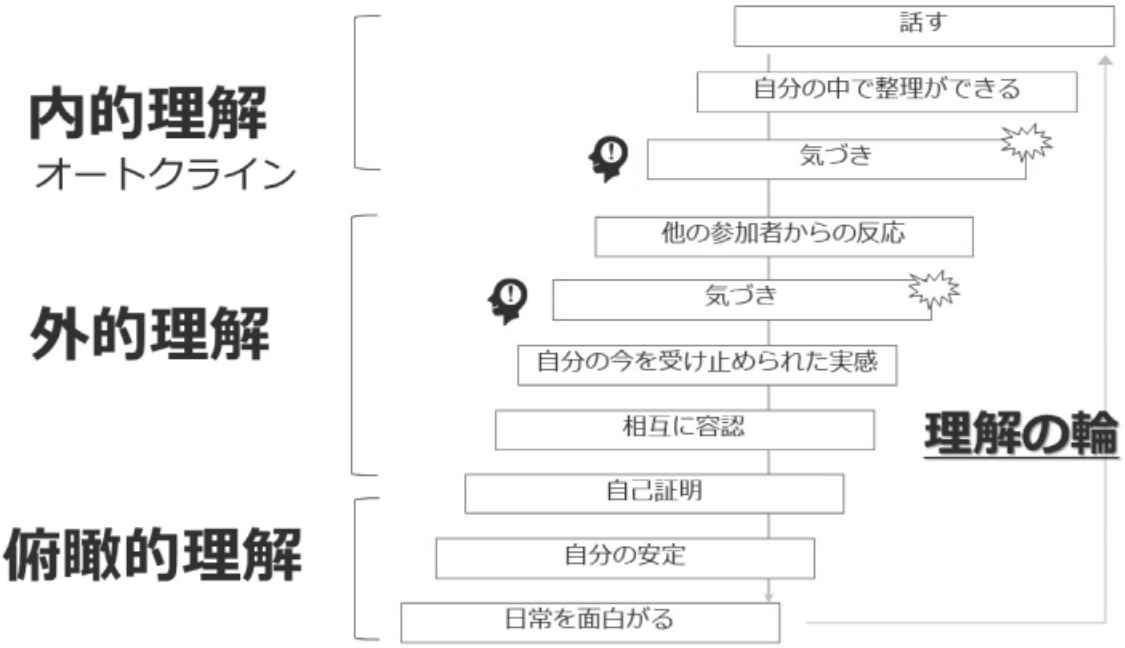


図 1　参加者の現状理解の 3 つのステップ（著者作成）

分の物語の面白い部分に焦点を当てることで自分を再評価しているのではないか。このあたりのプロセスは家族療法から派生した解決志向アプローチやナラティブアプローチの技法の作用と重なることも多い。

こういった「相手が聴いていることも踏まえて、相手からの話も汲んだ上で自分のことを話す」行為は、対人援助そのものである。発信を受けて、受信者側の情報の取捨選択は自由で、決めるのは受信者側であることがまた利点でもある。この利点とはパターナリズムからの解放である。何かをなおしている感も、なおされている感もない。しかも学んだり、楽しみにしたりしている。それも含んだオンラインミーティングの経験から、人への信頼、他者への信頼、自分への信頼を生み、最終的には支援への信頼につながっているともいえるのではないか。そのあたりをインタビューでは「なかなか経験できないことをしているのではないか」とも評されたのではないか。

区切りを感じる機会（例：季節行事、歓送迎会等）がコロナ禍で省かれる中で、月一回の「定例化」も作用したともいえる。日常の変化が、社会によって（特にコロナ禍によって）もたらされたものなのか、自分の選択によってもたらされたものなのか、「変化の整理」が必要となっていたことも複数語られていた。このオンラインミーティングの 1 年分 12 回は、コロナ禍が生んだ取り組みである。団（2017）は「大きな厄災に見舞われると、ささやかに大切にしてきた個人の物語は吹き飛ばされてしまう」「深い悲劇で私たちが一色に染められてしまう。だから回復の一つは共通の大きな被災物語に絡められた人たちが押しやられてしまった個人の物語を取り戻すことではないか」と震災支援のプロジェクトに対して記している。2020 年から 2021 年は世界全体がパンデミックという被災状況でもある。他の人の物語を聴くことで、自分を相対化し、重ねたり、投影したりすることで自分を取り戻していたのではないか。また、ナラティブ・セラピーでは「言葉（ワード）が世界（ワールド）を作る」ともいわれる。コロナ禍の「となりの事情」でも参加者の 2 巡にわたる「言葉（ワード）」で自分の物語（ワールド）を再構成する機会になっていたといえるのではないか。

2　性急な答えを出さないような対応力の養成

インタビューの語りからわかったことは、「対話」を信頼できる関係が循環的に築かれていった様子である（図 2）。オンラインは自宅で行うので、従来よりもリラックスして参加していることも多い。その環境は自己開示を生み、親密性や信頼を生む。それがまたリラックスする材料となって循環して作用をする。この背景にあるのは「継続」である。「家族をテーマにした事例検討会」が 2001 年から存在する事実、なくならない関係と思えるからこそ、安心して話せていたのもあるだろう。コロナ禍だからオンラインで何かをしようと思ったとしても、相手がいないと始まらない。そこに集まりたいと思える関係性がすでに存在してき

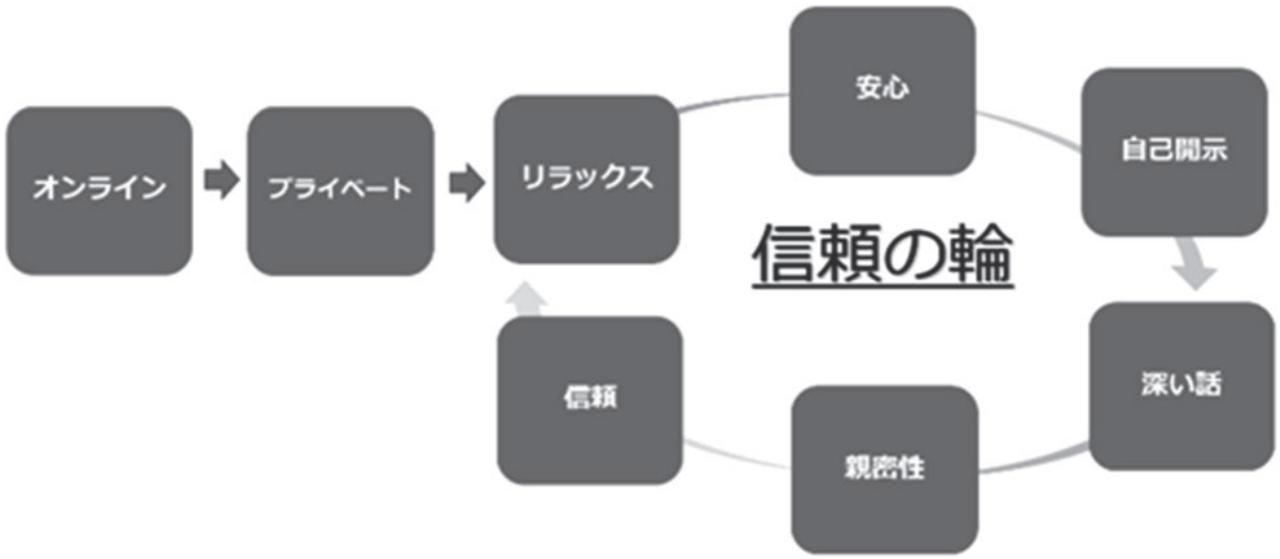


図 2　オンラインミーティングによる親密性形成モデル「信頼の輪」（著者作成）

たことも大きい。

このオンラインミーティングで起こっていた作用はセルフヘルプ・グループの機能とも重なる（一般的に仲間に会える場所を作る、情報交換をする、問題行動や症状の改善、問題との付き合い方を考える、社会に対して働きかけるが機能とされる）。また、支援の機能として、「ウィットネス（witness）」という「証人となる」ことも震災支援における支援者の役割として、数多く報告されている（村本 2021 他）。自分の頑張りを知ってくれている人、あの時の私の一歩を知ってくれている人が、今も見ているということによるエンパワメントである。自分の行いを理解している人がいることで、明日からも頑張ろうと思える。ウィットネスという機能は「継続」があってこそ成り立つ。継続性のある「となりの事情」のような取り組みは、お互いを「証人」と感じている作用もあるのではないか。

インタビューではミーティング参加者を「ちゃんと生活をしている人たち」と呼んだ発言もあった。その支援者たちはすぐに「こたえを求めない」とも評された。現在の現場の多くで行われている、そして支援者養成で重きが置かれているのは「問題への注目」とその解決のための最適解を性急に探ることである。そのことへの限界もインタビューでは語られていた。ネガティブ・ケイパビリティ[1]という言葉をインタビューで話した方もいた。この言葉は「不可解さに、性急に結論を与えず、神秘さと不可思議さに身を浸しつつ、宙ぶらりんを耐え抜く力」（帚木 2017）とされ、昨今見直されている。実際インタビューではこの「となりの事情」について「不思議」という言葉も繰り返し用いた方もいた。家族理解においては円環的因果律に基づく理解が役に立ってきた。「家族」を学ぶ支援者は、家族も社会も複雑であり、一つの答えがないこと、すぐに答えが出ることが難しいことがあることも理解し、共有できている。そういったことを耐える力が、このコロナ禍における生活や支援で求められてもいたのではないか。これまで、支援者は「明確に」「性急に」答えを出すこと、つまり「ポジティブケイパビリティ」の醸成に偏っていなかっただろうかという問いである。付け加えると「真の創造行為にはネガティブ・ケイパビリティが欠かせない」（帚木 2017）ともいわれている。このこともう一度頭に入れておきたいのがコロナ禍の経験ではないか。

社会が大きく変化し、支援者養成で習ったことや、これまでの経験だけでは通用しないことも多くなった。「となりの事情」の参加者は現在の社会にアジャストすることが必要だと強く感じ取っていた。同時に、今まで描いていた未来とは、異なる未来が来ることも容易に予想できていた。そのため一層他の人がしていることが自分の参考になっていたのではないか。「となりの事情」では、月を追うごとに参加者のそれぞれの物語は当然更新され、毎回展開する。それがまた他者にとっての見本であり、選択可能性の提示となる。さらに繰り返し話すことで、伝わる話し方も身に着ける。これらは支援者個人が社会の中で安定的に機能する存在であり続けるための「予防的な取り組み」ともいえる。

3　支援者の賦活化

「リフレッシュになった」「楽しみ」「会うのが楽しみ」など、参加者が元気になっているエピソードは複数語られた。「コロナうつ」という言葉ができたようにこの時期の心的負担はいうまでもない。繰り返し、出会うことが、オンライン上のグループでも効果があることが示された。遠い人も、忙しい人も参加できるということは、ネットワーク形成の可能性が広がる。

また、その裏には、より近い考えの人が集まり続けることにも拍車がかかる落とし穴も潜んでいる。つまり多様性を失う可能性である。過去 12 回で、初めて参加した人がいた回が半分以上はあった。しかし、この辺りの配慮や工夫が必要であることも明らかになった。

最後に、このインタビュー調査の限界について触れておく。インタビュアーがこの会の主催者であり、これまでも、そしてこれからも関係性が継続する（してきた）ため、デメリットやマイナス面の声は拾えていない可能性もある。加えて、関係性ができた上での調査だったため、心理的作用の側面が多く語られた感が否めない。この辺りは、筆者の今後の研究の課題としたい。

Ⅶ　まとめ

オンラインでの支援者支援の活動「となりの事情」では、「信頼の輪」「理解の輪」の循環による相互作用の結果として、「物語を通した現状理解の促進」「性急

な答えを出さないような対応力の必要性への気づき」「支援者の賦活化」が成果として一定あった。これは支援者ネットワークの形成と維持に一定つながるものといえるだろう。既存のネットワークはより深くなり、新規のつながりでは物理的距離も越えたネットワークが形成されたのが、この1年分12回の取り組みといえるのではないか。

筆者の過去の研究（千葉ら　2013）での「家族をテーマにした事例検討会」の成果と比較すると「モチベーションの向上」「勉強仲間とのつながり」など支援者の意欲向上というところでは重なるところもある。一方で事例検討を行っていないため、支援の技術的な向上や家族理解に対する学びの部分は「となりの事情」のインタビューからは当然見られなかった。しかし、これまでになかった学びとして「支援者としての姿勢」や「支援者という生き様」がどうあるべきかという「本質的な問い」があった。「支援の高度化」という言葉ではなく、「支援者としての深いところも含めた成長」つまり「援助者としての深化」ともいえるテーマを扱っていたともいえる。

本稿は、オンラインミーティングの可能性を検証する機会でもあった。オンラインにおいても、支援者は支えられ、つながり（ネットワーク）も一定形成していた。そのネットワークは、リアルで出会うことができる、これまでの地域密着型よりも、地域を超えたネットワークであることも特徴的であった。そして、オンラインミーティング「となりの事情」には、現状をよりよく理解しようとする努力を怠らない、そして焦らずに、粘りながら日々に向き合い、その中で未来に向けての柔軟な展開を粘り強く模索する支援者の姿があった。参加者たちは、対話を行い、熟考し、コロナ禍によって変化した社会を踏まえて、その先の未来に向けて、相互にエールを送りあいながらこの時代を歩んでいた。これは、支援の本質の一つであるといってよいのではないか。

パンデミック状況の始まりにおいて、多くの人が「ペスト」や「スペイン風邪」を検索し、その記録が再度脚光を浴びた。東日本大震災では「稲村の火」に代表されるよう「民話」などの伝承が大きく再評価された。今、私たちができることの一つは、物語の「記録」である。パンデミックにおける支援者の試行錯誤も含めた取り組み自体も全てが未来への財産となるだろう。コロナ禍に向き合った支援者の1年間12回の記録を残すことも本稿の目的である。

末筆になりましたが、本研究の趣旨をご理解いただきインタビュー調査を了承いただきました皆様には心より感謝申し上げます。

注

1　ネガティブ・ケイパビリティ（Negative capability）は詩人ジョン・キーツが不確実なものや未解決のものを受容する能力を記述した言葉。「消極的能力」「消極的受容力」「否定的能力」ともいわれる。

文献

千葉晃央・仲村利江・田原由喜子・中村昌美（2013）「地域における学びの場づくくりと専門職のつながり～家族をテーマにした事例検討会の10年～」『対人援助学を拓く』編者：村本邦子・土田宣明・徳田完二・春日井敏之・望月昭　晃洋書房　105-118.

団士郎（2021）「オンライン講座　団士郎さんと家族を学ぼう　研修資料」2021年8月21日分

団士郎（2020）「木陰の物語にできること～東日本家族応援プロジェクトに自作マンガを使うことになって八年目，小冊子『木陰の物語』，一万冊配布も八万冊目になった今，『マンガ』に関する様々な角度からの考察も含めて～」 対人援助学研究 vol.10 対人援助学会 19-34.

帚木蓬生（2017）「ネガティブ・ケイパビリティ 答えの出ない事態に耐える力」 朝日新聞出版　52.141.

村本邦子（2021）「周辺からの記憶－三・一一の証人となった十年」 国書刊行会　15-17.

中村正（2020）「地域との協働をかたちにする支援者支援セミナーの経験」対人援助学研究 vol.10　対人援助学会　62-73.

中山駿・永吉実武（2017）「オンライン会議環境での知識創造の阻害要因と克服策：リサーチ・デザインの構築」 経営情報学会　全国研究発表大会要旨集 2017s（0）　一般社団法人 経営情報学会　9-12.

高松里（2021）「改訂増補　セルフヘルプ・グループとサポート・グループ実施ガイド　始め方・続け方・終わり方」金剛出版　24-32.